

司馬相如「自叙」攷

大 平 幸 代

一 はじめに――問題の所在

中国の歴史書は、既存の記録を校訂整理することによって編まれてきた。はなはだしくは一卷のほとんどが他の書物の引き写しである場合もある。いまさら言うまでもないが、『漢書』のいくつかの伝は『史記』にわずかに手を加えただけのものであるし、その『史記』にしても、それ以前の文献を利用して編まれていることは、先人のつとに指摘するところである。「述べて作らず」を著述の旨とするのは、史書の編纂においても変わらないのだから、これ自体に不都合はないのだが、後世のわれわれが出所の明記されていない原資料にまで遡ろうとする場合には非常な困難にぶつかることになる。

本稿でとりあげる司馬相如の伝の場合、『史記』と『漢書』の内容がほぼ一致している。細かいことを言えば、『漢書』で若干文字を入れ替え、表現を整理したところもあるが、ここではそれは問題にしないでおく。注目したいのは、

さらにその前段階、すなわち『史記』『司馬相如列伝』が司馬相如の「自叙」(自伝)に基づくとする説の存在である。唐の劉知幾『史通』外篇「雜説上」には次の一節がある。

馬卿爲自敘傳、具在其集中。子長因錄斯篇、卽爲列傳、班氏仍舊、曾無改奪。尋固於馬揚傳末、皆云遷雄之自敘如此。至於相如篇下、獨無此言。蓋止憑太史之書、未見文園之集、故使言無畫一、其例不純。

馬卿(司馬相如)は自叙伝を作っており、すべてその文集の中に収められている。子長(司馬遷)はそれによって列伝を作り、班氏(班固)はそれをそのまま受け継いで、まったく改変していない。班固は『漢書』の「司馬遷伝」「揚雄伝」の末には、ともに「遷(または雄)の自叙に、このようにある」と言っている。にもかかわらず「司馬相如伝」の末にのみこのように言わない。これは恐らく『史記』のみに拠っていて、司馬相如の文集を見ていないからだろう。ゆえに表現に統一が取れておらず、体例が乱れているのだ。

劉知幾が言うように、『漢書』の「司馬遷伝」「揚雄伝」はそれぞれの「自叙」に基づいたものであり、班固自身がそれを伝中に明記している。それに対して『漢書』「司馬相如伝」には「自叙」を基にしたという記載がないため、劉知幾はその体裁の不統一を批判しているのだが、そもそも『漢書』(さらに逆上って『史記』の)「司馬相如伝」は相如の「自叙」に拠るものだろうか。また、果して司馬相如はほんとうに「自叙」を作ったのだろうか。それが事実でないとするれば、「自叙」説はどこから生まれたのだろうか。

なお、司馬相如が「自叙」を著したという説は、劉知幾に始まるわけではなく、『隋書』儒林伝の劉炫伝にも「通人司馬相如・揚子雲・馬季長・鄭康成等、皆自敘風徽、傳芳來葉。(多くの書物に通じた人、司馬相如、揚雄、馬融、鄭玄らの自叙はみな立派な風格をそなえていて、芳名を後世に伝えている)」という。これらの説は今日まで引き継がれており、たとえば、金国永『司馬相如集校注』は「自叙」説に疑問を呈しながらも、明の張溥『漢魏六朝百三家集』『司馬文園集』に則って「自叙伝」を収載している。⁽²⁾ この長きにわたる司馬相如の「自叙」をめぐる議論にささ

やかな一説を加え、司馬相如「自叙」説出現の土壤を作ったと思われる魏晉の状況を考察するのが本稿の目的である。なお、二、三章では、考証の前提となる事柄を整理するにとどめ、四章以降に仮説を示すことにするが、考証の対象が郭璞注「子虚上林賦」の編纂およびその直前の西晋時期の気風を中心とすることをはじめに断つておく。

二 「司馬相如伝」の内容

(1) 『史記』『司馬相如列伝』

以降の論述の便をはかるため、まずは『史記』『司馬相如列伝』の内容を簡略に述べておく。

①司馬相如は蜀の人、字は長卿。幼いころより読書と剣術を好んだ。学問を終えてのち景帝に仕えたが、梁の孝王が多くの文人を食客としていたのを見て梁に遊び、「子虚賦」を著した。

②梁の孝王の没後、蜀の臨邛に行き、当地の富豪である卓王孫の娘（卓文君）と成都に駆け落ちするも、家に資財なく、夫婦で酒屋を営む。その後、世間体を気にした卓王孫の許しを得、資産家となる。

③ ①の「子虚賦」を読んだ漢の武帝に召しだされ、「天子遊獵賦」を作る。（司馬遷による）「天子遊獵賦」執筆意図の解説。

④ 「天子遊獵賦」の引用

⑤ 賦を奏上し、郎官となる。（司馬遷による）「天子遊獵賦」評。

⑥ 西南夷への道路開鑿をめぐるトラブル解決のための使者となる。

⑦ 「巴蜀の父老に喩す檄」の引用

⑧ 帰京後、西夷への道路開鑿を武帝に進言し、西夷への使者となる。途中、蜀に立ち寄り、歓待を受ける。

⑨ 西南夷と通じることの不利益を説く声がふえ、文章を著して天子を諫めることとする。

⑩ 「蜀の父老を難ずる文」の引用

⑪ 賄賂を受けたとの批判をあげ、一時官を辞すがまもなく復職。武帝の狩りに従って長楊宮に行き、帰路に宜春宮に立ち寄る。

⑫ 「獵を諫める書」の引用

⑬ 「二世を哀しむ賦」の引用

⑭ 孝文園の令となる。武帝が仙道を好むのを見、「大人の賦」を著す。

⑮ 「大人の賦」の引用

⑯ 病により官を辞す。（相如の死。）武帝が使者を遣わし、相如の著作を取りに行かせるが、相如は既に亡く、家には「封禪の文」が遺されているだけであった。

⑰ 「封禪の文」の引用

⑱ 司馬相如の没後五年して、武帝は土地神を祭り、八年たつて泰山で封禪を行った。

以上が、「司馬相如伝」の内容であり、最後に司馬遷の太史公論贊が加えられて、伝が終わる。一見してわかるように、「司馬相如伝」は文章の引用が伝の大半を占める。しかも、「天子遊獵賦」を筆頭に一篇の分量も多いため、史記の個人の列伝の中で最も長いものとなっている。

(2) 「自叙」

司馬相如の「自叙」は現存しないので、その内容を確かめるすべはないが、先にあげた『史通』に「それによって列伝を作った」というからには、基本的に『史記』と同じ内容をもっていたはずである。では、どの程度重なっていたのだろうか。『史通』の言によれば、『漢書』「司馬相如伝」と司馬相如の「自叙」との間には、少なくとも、『漢書』

「司馬遷伝」に対する司馬遷の「自叙」、『漢書』「揚雄伝」に対する揚雄「自叙」と、同程度の類似性はあったはずである。両者のうち、揚雄の「自叙」については元の形が定かでないが、司馬遷の場合は『史記』太史公自序であることがあきらかであって、『漢書』「司馬遷伝」の「遷の自叙に爾云う」以前の文は『史記』太史公自序の一部（各巻の内容を述べた部分など）を省略しただけでその他はほぼ「太史公自序」の文章を襲っている。ということは、劉知幾の見た「自叙」は『史記』『漢書』の「司馬相如伝」とほぼ同じものだったと考えてよいだろう。ただし、司馬遷の場合と同じく、全文が重なっていたとは限らない。『史通』内篇「序伝」には、こういう。

蓋作者自叙、其流出於中古乎。案屈原離騷經、其首章上陳氏族、下列祖考、先述厥生、次顯名字。自叙發迹、實基於此。降及司馬相如、始以自叙爲傳。然其所敘者、但記自少及長、立身行事而已。逮於祖先所出、則蔑爾無聞。……而相如自序、乃記其客游臨邛、竊妻卓氏、以春秋所諱、持爲美談。雖事或非虛、而理無可取。

作者の自叙というのは、中古に始まったものであろうか。屈原の「離騷經」には、その始めに上は遠い氏族を列ね、下は近い祖先を列ね、まずはその出生をのべ、次にその名や字を明らかにしている。自叙の発生というのは、実にここに基づいている。時代が下って司馬相如になって、初めて自叙の形で伝を作った。しかし、その叙述は、ただ幼い頃から大人になるに及んでの、世間に出て活躍した事柄を記したにすぎない。祖先の出自については、黙して語らない。……司馬相如の自叙は、なんと臨邛に客游して、卓氏（卓文君）を（札にのつとらずに）不正に妻としたことを記し、『春秋』の忌むところを、美談にしてしまっている。その事自体は事実かもしれないが、道理からいって取り上げるべきではない。

傍点部にあるように、劉知幾の見た「自叙」は、卓文君との駆け落ち譚を含む司馬相如の伝で、先ほどの『史記』の内容でいえば①②を含むことは確実である。ただ、やはり、その他にどこまでの範囲を含んでいたのかは分からない。さて、『史通』の言うとおりなら司馬相如の「自叙」伝は相如の独創ということになるが、そうでなければ逆に、

司馬遷や揚雄の「自叙」からの類推により司馬相如「自叙」説が生み出されたとも考えられよう。そこでまず、従来の議論を整理するために、章を改めて『史通』の説についての代表的な見解を見てみよう。

三 従来の説の検討

宋の王應麟『困学紀聞』卷十二には、こういう。

意者、『相如集』載本傳、如賈誼『新書』末篇、故以爲自敘歟。

思うに、『相如集』に本伝を載せていたのであろう。賈誼『新書』の末篇と同様である〔『新書』には附録として『漢書』賈誼伝をのせる〕。それを自叙だとみなしたのではないか。

これは、司馬相如の文集の編者が、(書物の最後に序伝をつける体裁にならつて)史書から附録として「伝」を補っていたものを、後人が「自叙」だと誤ったのだという考え方で、これ以降、この見方が一般的になったようである。それに対し、明の張溥『漢魏六朝百三家集』は「自叙」説を主張する。

余謂此傳果馬卿自作、安得有相如已死、天子遣所忠索書。又安知沒後數歲、上始祭后土及禮中岳事乎。然則『自敘傳』應至『相如既病免、家居茂陵』爲止、此後別有結束、惜今不傳、而『天子曰』以下、還是太史公補足之。近世學士謂『相如集』中『傳』乃校集者取子長所作附之、非其自筆。……而俗儒多以亡奔、滌器等事胡不少諱、以此爲非馬卿筆。不知馬卿正自述慢世一段光景、委曲周至、他人不能代之寫照阿堵中也。

私はこう思う、この伝が本当に相如の作ならば、どうして相如が死んでから、天子が所忠を派遣して書を求めさせたことが載っていたりするか。またどうして没後数年して帝が土地神を祭り中岳で祭礼を行ったことを知っているのだろうか。しかれば、『自叙伝』は「相如は病氣になって官を辞すると、茂陵に移り住んだ」までであつ

たはずで、その後には別の結びがあつたのだが惜しいことに今に伝わっていないのだ。「天子曰く」以下は、やはり司馬遷が補つたのである。近世の学者は『相如集』の中の『伝』は『集』の編纂者が司馬遷の『伝』を附載したもので、相如自身の作ではないと言っている。……凡庸な学者はしばしば、駆け落ちや皿洗いをしたことをどうして少しも憚らないのかといい、だからこれは相如の作ではないという。これは相如の礼教にこだわらず世を侮つたさまを自ら述べているのであつて、細かなことまでつぶさに語っており、他人がそういったものを代わりに描写することなどできない。

張薄が想定する結びがどのようなものかは分らないが、どうやら『世説新語』風の逸話を相如自身が記したものと考へていたようである。相如の逸話の性格を、礼教にこだわらない「慢世一段の光景」とするのは興味深い指摘であり、のちに改めて触れることにするが、それを相如自身が記したとする見方には、にわかには従いかねる。

つまるところ、自叙説をとるにしても採らないにしても、決定的な根拠に乏しく、慎重になればなるほど結論を保留せざるをえない。清の梁玉繩『史記志疑』卷三十四には、(1) 司馬遷が自叙によると明言していないこと、(2) 伝中に「遊獵の賦」を「侈靡にして理義に非ず」と誹っていること、(3) 天子が著作を求め「封禪の文」を献上したのは相如の没後であること、から「自叙」ではないとする。ただし、梁玉繩は同時に、あるいは司馬遷が相如の作(自叙)を増補改定したのかもしれない、という可能性をも指摘する。また、清の何焯『義門讀書記』卷十八に「伝中に司馬相如の没後のことまで述べているのだから、ただ自叙を録しただけではない」というのも、同様に折衷的な見方であろう。

諸家の指摘するように、『史記』「司馬相如伝」には司馬遷の評語と見なさざるを得ない部分があるため、「自叙」によつていても何らかの改変を経ているはずであるし、少なくとも没後の部分は加筆されていると考えざるをえない。では、もし「自叙」が存在したとすれば、どのような形態をとっていたのだろうか。晋の皇甫謐『玄晏春秋』

や陶淵明「五柳先生伝」のような独立した自伝的作品が作られるのは、後世のことである。『史通』の言うように序伝の先鞭をつけるものとすれば、やはり何らかの書物の序であったと考えるのが自然であろう。

先に触れたように、書物の最後に「序」をつけ、その中で祖先からはじまって自分の経歴や書物編纂の意図を語るのが、『史記』や『漢書』の「自叙」のスタイルである。⁽⁴⁾司馬相如の自叙が同様に何らかの書物につけられていたとすれば、一体どの書だろうか。『漢書』芸文志には、『凡将』一篇、『荊軻論』五篇、『司馬相如賦』二十九篇、をのせる。『凡将』は文字学の書で、現在は断片しか残っておらず、序がついていたという記録はない。『荊軻論』は『漢書』芸文志に「軻、燕の為に秦王を刺し、成らずして死す、司馬相如等、之を論ず」とあることから、『史記』「刺客列伝」に見える荊軻について論じた文であることが分かるが、複数の人の論であって、相如の序があった可能性は極めて低い。『司馬相如賦』二十九篇も、相如がまとまった形の書物にしたわけではない。『史記』「司馬相如列伝」によれば、相如の病が重いことを知った武帝がその著作を手に入れるため使者を派遣したところ、相如は既に亡く、家には書物が無かったという。相如の妻に尋ねると、こう答えたという。

長卿固未嘗有書也。時時著書、人又取去、即空居。長卿未死時、爲一卷書。曰、有使者來求書奏之。無他書。

長卿（相如）はもともと書物を所蔵しておりませんでした。折にふれて著述はしていましたが、それもまた、人が持つていきましたので、家には何もありません。ただ、長卿は生前一卷の書を著し、使者がやって来て書を取めたらこれを奏上するようにと申しておりました。その他の書はございません。

これによれば、相如の生前に、まとまった文集のなかったことは明らかである。以上のことから考えて、相如自身が書物の序を表していた可能性は非常に低いといってよいだろう。

四 仮説——郭璞注本との関係

これまで見てきたとおり、「自叙」説は根拠にとぼしい。では、司馬相如が「自叙」を著したのでないとすれば、王応麟などが言うように後世の『相如集』の編纂者が『史記』ないしは『漢書』の「伝」を補ったのであろうか。もちろんその可能性も大いにあるが、ここではそれとは別にもう一つの説を示してみたい。

司馬相如には、後世に編纂された文集のほかに、注釈書がある。厳密に言えば、「相如集」ではなく、単篇の賦の注釈本である。『隋書』経籍志にみえる「梁に郭璞注子虚上林賦一卷有り」というのがそれで、郭璞の注は『文選』李善注にもそのままの形ではないが採録されている。⁽⁵⁾この「子虚上林賦」とはすなわち、先にあげた司馬相如伝④の「天子遊獵賦」のことであるのだが、⁽⁶⁾ただ、実のところ、郭璞は「子虚上林賦」「天子遊獵賦」だけでなく、『漢書』「司馬相如列伝」の一部にも注釈をほどこしていたらしい。『漢書』には歴代の学者が注をつけており、それを集大成した唐の顔師古が「漢書叙例」の中でそれら歴代の注釈者を列挙し、簡単な説明をくわえている。それら注釈書の大部分は『漢書』全体に対する注釈なのだが、次の二例だけは異なる。

張揖、字稚讓、清河人、一云河間人。魏太和中爲博士。止解司馬相如傳一卷。

張揖は、字を稚讓といい、清河の人、一説に河間の人。魏の太和中に博士となった。ただ司馬相如伝一卷を解するのみ。

郭璞、字景純、河東人、晉贈弘農太守。止注相如傳序及遊獵詩賦。

郭璞は、字を景純といい、河東の人、晋のとき弘農太守を贈られた。ただ相如伝序および遊獵の詩賦に注するのみ。張揖と郭璞の注釈がいずれも「司馬相如列伝」のみにとどまるのは、この伝の特異性を表しているよう。先に述べたよ

うに司馬相如伝のかかなりの部分は作品の引用で構成されており、特に賦の分量が多い。漢代の賦は難解であるため、魏晋の頃には多くの人にとって理解しがたいものになっていた。『文心雕龍』鍊字には、魏の状況を次のように述べている。

及魏代綴藻、則字有常檢、追觀漢作、翻成阻奧。故陳思稱、「揚馬之作、趣幽旨深、讀者非師傳不能析其辭、非博學不能綜其理。」豈直才懸、抑亦字隱。

魏の時代の修辭になると、字にも通常よく使われる範囲がきまってくる。そこから漢代の作をみてみると、一層難解にみえる。ゆえに曹植は「揚雄や司馬相如の作は深淵なる意と趣をたたえているが、読者は師につかなければその表現を理解できず、博学の人でなければその理を把握することができない」といった。これは揚雄・司馬相如の才能が飛び抜けているためだけでなく、字の意が曖昧でつかみにくいことにもよる。

この状況は晋になっても変わらない。⁽⁷⁾張揖と郭璞の二人はいずれも訓詁学者として知られ、賦を読むことのできる博学の人であった。張揖には『広雅』や『古今字詁』、郭璞には『爾雅』注や『三蒼』注などの作があつて、この二人が、文字学的、博物学的知識が必須である司馬相如伝のみに注釈をつけたのも、決して偶然ではないだろう。さて、本題にもどって、郭璞注だが、「ただ相如伝序および遊獵の詩賦に注するのみ」というのは何を指しているのだろうか。「遊獵の詩賦」が「天子遊獵賦」すなわち「子虚上林賦」を指すことは疑いないが、一方の「相如伝序」とは何だろうか。これが「漢書叙例」であることからすれば、もちろん、『漢書』「司馬相如伝」であるに違いないが、「序」の一字のあるのが解せない。それを解く糸口として、『史記』『漢書』の「司馬相如列伝」に見える郭璞の注釈をみてみよう。

『漢書』「司馬相如列伝」顔師古注に引かれた郭璞の注釈は④の「天子遊獵賦」（子虚上林賦）の部分がほとんどで、それ以外には②に「盧は、酒盧なり」という注があるのみである。一方、『史記』三家注をみると、①に一箇所、

②に七箇所、③に四箇所、⑮に一箇所、郭璞の注が引かれている。そのうち、⑮の注は、西王母の「勝」について「勝は、玉勝なり」（『集解』引郭璞）というもので、これは『山海経』西山経の郭璞注に全く同じ語が見えるため、『山海経』注からの引用だと見なしてよい。それに對し、②③の部分の注は、「家居徒四壁立」に對し「貧窮を言うなり」、「無是公者、無是人也、明天子之義」に對し、「以て折中の談と為すなり」とするなど、明らかに「司馬相如伝」についての注解である。以上のことから、『漢書叙例』にある「相如伝序」は①②③の部分、つまり「天子遊獵賦」より前の部分だということが推定できる。

つまり、顔師古が「漢書叙例」に述べた郭璞の注釈は『漢書』注というよりは、「天子遊獵賦」の注釈書であって、おそらく『隋書』に「郭璞注子虚上林賦一卷」とされたものと系統を同じくする書物であつただろう。そして、その賦の注釈には、「伝序」として賦の前段までの司馬相如の伝が附されていたと考えられるのである。

さて、この「伝序」部分の内容をあらためて見てみれば、司馬相如が諸国を渡り歩いて宦遊にもあき、卓文君と財産を手に入れ、武帝にも認められて成功を収めたところである。これは、まさに『史通』にいう「その叙述は、ただ幼い頃から大人になるにおよんで、世間に出て活躍した事柄を記したにすぎない」というのにも合致しているのではないだろうか。推測の域は出ないが、劉知幾が見た「自叙」が顔師古のいう「伝序」であつたことも十分考えられよう。

では、このような序のついた「子虚上林賦」のテキストは郭璞が始めたものののだろうか。郭璞だとすれば、なぜ、張揖のように「司馬相如列伝」全体ではなく、「伝序」と「遊獵賦」だけに注したのだろうか。郭璞の「遊獵賦」への関心は、『爾雅』『山海経』に注したのと同じく博物学的興味と考えられようし、本稿の考察の範囲を越えるのでひとまず置いておくとして、はたして「伝序」に意味はあるのだろうか。もし附録として司馬相如の伝記を載せるのならば、もう少しあとの事績まで付け足しても良さそうなのではないか。ここで、ひとつ考える手立てになりそうなの

は、劉知幾『史通』内篇「序伝」の次のような指摘である。

班固『漢書』、止敘西京二百年事耳。其自敘也、則遠徵令尹、起楚文王之世、近錄「賓戲」、當漢明帝之朝、苞括所及、逾於本書遠矣。

班固の『漢書』は、ただ前漢二百年の事を述べるにすぎないのに、その自叙ときたら、遠くは始祖の令尹文子をあげて、楚の文王の世から始まっており、近くは「答賓戲」を録して、漢の明帝の時代に及んでいる。その包括する範囲は本書をはるかに超えている。

司馬遷が太史公となったところで自叙の筆を止めているのに対し、班固が『漢書』の範囲を超え、明帝の時代の自作「答賓戲」まで自叙に入れていることを非難していることから見れば、「自叙」は人の一生を総括しようとする「伝」とは違い、本文の範囲内の出来事を記すのが本来のありかたであったことが分かる。このように、書物の「序」の目的が、あくまでその書物を著すに至るまでの経緯を書き記すことであるとすれば、「子虚上林賦」をテキストの本文とみた場合も同様に、その序はやはり本文に至るところまで止めておかなければならないことになる。ただし、劉知幾がいうのは著書、とりわけ史書の序の場合である。「子虚上林賦」は確かに一巻の書物として単行するだけの分量をそなえているが、一篇の賦作品の序としてみた場合、同様のことが言えるのだろうか。

五 「賦序」のやくわり

(1) 前漢から魏晉の賦序

漢賦の序には、賦の創作の背景を説明するものと、賦とは何かという意義を闡明にしようとするものがある。後者は例えば、班固「兩都賦」序のように、それ自体が賦論として独立した意味をもつ。では、前者はどうかといえは、

賦が作られた時の状況を述べ、賦の内容（創作意図）を明らかにする働きを持つのだが、前漢の賦序に限りて言えば、その大半は、賦の作者自身の作ではない。後世の人が『漢書』などの史書から賦を作るに至った経緯を記した部分を抜き出してきたものである。これについては、すでに先人の研究があるので、⁽⁹⁾ここで繰り返す必要もないが、一つだけ原文のまま例をあげておこう。

明年、上將大誇胡人以多禽獸。秋、命右扶風發民入南山、西自褒斜、東至弘農、南畝漢中、張羅罔罾罾、捕熊羆豪豬虎豹狢獾狐兔麋鹿、載以檻車、輸長楊射熊館。以網爲周防、縱禽獸其中、令胡人手搏之、自取其獲、上親臨觀焉。是時、農民不得收斂。雄從至射熊館、還、上長楊賦、聊因筆墨之成文章、故藉翰林以爲主人、子墨爲客卿以風。

これは『文選』巻九に載せる揚雄「長楊賦」の序で、賦を作ることになったいきさつとその意図を述べているが、『漢書』揚雄伝からの引き写しであり、「明年」から始まるところすらも修正されていない。もともと、『漢書』揚雄伝は揚雄の自叙によっているから、作者自身の序文と言えなくもないが、『文選』に収録されている他の前漢の賦の序もまたみな同様に『漢書』の記述によっている。では、後漢の賦はどうだろうか。後漢末の禰衡「鸚鵡賦」（『文選』巻十三所収）の序は、

時黃祖太子射賓客大會、有獻鸚鵡者、舉酒於衡前曰、「禰處士、今日無用娛賓、竊以此鳥自遠而至、明慧聰善、羽族之可貴、願先生爲之賦、使四坐咸共榮觀、不亦可乎」。衡因爲賦、筆不停綴、文不加點。

時に、黄祖の長子の射が多くの賓客を招いて宴を開いた。鸚鵡を献ずるものがいたので、衡の前に酒を差し出しながらこういった。「禰處士、今日は客人を楽しませるものがない。そこで思うに、この鳥は遠くからやってきて、非常に聡明で、鳥の中でも貴重なものだから、どうか先生にこの鳥の賦を作っていただいて、ここにいる者みなに見せて楽しませていただくわけには参りますまいか」。そこで衡は賦を作ったが、筆は停まることなく、

できあがった文に訂正を加えることもなかった。

一見して分かるように、史書の伝と同様の記述方法をとっている。これがいつ賦に附せられたのかは不明である。『後漢書』の「櫛衡伝」や『芸文類聚』に引く「櫛衡別伝」に類似の記載があるが、やや文字に入りががあるので、他書からとったものかもしれない。⁽¹⁰⁾ただ、「黄祖の太子射」という呼び方、「筆は綴るを停めず、文は点を加えず」という描写からみて、本人の手になるものでないことだけは確かだろう。

ただし、後漢には、賦の作者自身が創作状況を説明する序をつけることも行われるようになっていた。⁽¹¹⁾王延寿「魯靈光殿賦」には、魯の靈光殿の説明と、自身がそこに到ったときの感慨を説き、賦の序としている。曹植「洛神賦」の序も同様で、洛神の説明と洛水に至り感じるところがあつて賦を著したということを述べる。また、嵇康・潘岳・陸機など魏晉の賦には作者の手になる序が少なくない。この点について、本稿ではこれ以上詳しく論じる準備はないが、賦と序が一組のものとして示される傾向が強まっていることだけは確認しておきたい。

なお、『文選』所収の賦のうち、序をもたないもののいくつかには、李善が注釈の中で他書の記載を引用して創作の経緯を説明しているが、そのうち、班彪「北征賦」、班昭「東征賦」の注には史書ではなく、『流別論』と『大家集』（班昭の別集）が引かれている。『流別論』は西晉の摯虞が編纂した大型の文学作品集『文章流別集』三十巻につけられた評論の部分であり、さらに目録の部分『流別志』とあわせて三位一体の構成をなしていたという。⁽¹²⁾『流別論』は早くに散逸しており、もとの姿をうかがうことはできないが、李善注に引くところをみれば、賦の創作の状況や内容についての記述があったことが分かる。

班彪「北征賦」李善注：

『流別論』曰、更始時、班彪避難涼州、發長安、至安定、作「北征賦」也。

『流別論』にはこういう。更始の時、班彪は難をさけて涼州に行った。長安を發し、安定に到って、「北征賦」

を作った。

班昭「東征賦」李善注：

『大家集』曰、子穀爲陳留長、大家隨至官、作「東征賦」。

『大家集』にはこういう。子の穀が陳留の長官になったので、班昭はその赴任に従い、「東征賦」を作った。

『流別論』曰、發洛至陳留、述所經歷也。

『流別論』にはこういう。洛を出発し陳留に到って、その遍歴について述べた。

これらの記述から、『文選』以前にも「序」としてか否かはともかく、書物の編纂の際には、しばしば賦の制作状況を説明する文章が附されることがあったものと思われる。賦は修辭のこらされた美文であり、婉曲な表現がとられるため、主題が分かりにくいことも多い。賦の序あるいはそれにかわる注釈が、賦の創作状況や主題（創作意図）を理解するために必要とされていたのだろう。

このような状況からすれば、「子虚上林賦」に賦序がつけられるのも自然なことのように思えるが、それにしても賦序としては司馬相如列伝の①②③は長すぎはしまいか。創作のいきさつを述べるのみならば、③のみあるいは①と③で十分であろう。次節では、視点をかえて、賦序としての②（恋愛譚）のはたらきについて考えてみよう。

（2）司馬相如の賦と人となり——魏晉における受容

ここで、司馬相如の作品の読まれ方を考えてみよう。『漢書』芸文志には二十九篇の賦が著録されているが、その多くは散逸し、『隋書』経籍志には「司馬相如集」一卷を著録するのみである。『文選』には『史記』『漢書』に収載されている「子虚賦」「上林賦」のほかに、「長門賦」を収める。これはその序の記述が史実とあわないことなどから偽作だとされており、賦の作者と序の作者が同一か否かも定かではないのだが、ここでは、序をふくめた賦が司馬相

如の作だとみなされていた点だけ確認しておけばよいだろう。⁽¹⁴⁾ 序にはこういう。

孝武皇帝陳皇后時得幸、頗妒。別在長門宮、愁悶悲思。聞蜀郡成都司馬相如天下工爲文、奉黃金百斤爲相如文君取酒、因于解悲愁之辭。而相如爲文以悟主上、陳皇后復得親幸。

漢の武帝の陳皇后は当時、帝の寵愛をうけていたが、たいへん嫉妬深かった。長門宮に移り住み、愁いに沈み悲しみにくれていた。蜀郡成都の司馬相如が天下に名だたる名文家であると聞き、黄金百斤で相如と妻の文君の酒を買い、そこで悲しみをいやす辞を作ってくれるように頼んだ。相如は文をつくって天子を諭し、陳皇后はふたたび寵愛されるようになった。

この序には、司馬相如伝の卓文君との駆け落ち譚が組み込まれており、賦の本文にうたわれる女性の悲しみとは異質の、賦の制作をめぐる裏話が中心になっている。司馬相如は賦の作家として著名であるとともに、卓文君との恋愛譚が人口に膾炙していたためか、宴席で卓文君を口説くために歌った詩や、⁽¹⁵⁾ 相如が妾を入れようとした時に卓文君が作った詩などが伝わっており、物語とともにそれをテーマとした詩や賦が生み出されていたさまが窺える。この序も、琴歌によつて卓文君を口説いた相如が、その文辞の巧みさによつて武帝の陳皇后への寵愛をとりもどさせたところとくに意味があるう。だが、「長門賦」とちがって「子虚上林賦」のテーマは天子の遊獵であり、一見したところ恋愛譚との関連は見出せない。

注目すべきは、魏晋のころには、これらの逸話が相如の「好色」を示すものとしてではなく、「奔放さ」を示すものとして認識されていたことである。とりわけ、放達をこの風流人士たちは、司馬相如を礼教に縛られない奔放な人物だとして称賛した。いわゆる魏晋の氣風を代表する嵇康の『高士伝』⁽¹⁷⁾には司馬相如について、次のような讃がある。

長卿慢世、越禮自放。犢鼻居市、不恥其狀。託疾避官、蔑此卿相。乃賦大人、超然莫尚。

司馬相如は世俗を侮り、礼教を超越して欲いままに行動した。ふんどしをつけて市場に居ても、そのありさまを恥じることはなかった。病だと偽って官職を退き、卿相たることを蔑んだ。そこで「大人賦」を作り、超然たることこの上なかった。

このように、駆け落ち話は、出世欲の少なさとともに、相如の超俗的性格を示すものと認識されている。魏晋のころには、礼教を無視した恋愛譚は、放誕のあかしでもあった。例えば、『世説新語』に次のような話がある。

阮仲容先幸姑家鮮卑婢。及居母喪、姑當遠移、初云當留婢、既發、定將去。仲容借客驢著重服自追之、累騎而返。曰「人種不可失」。即遙集之母也。（任誕第二十三・15）

阮咸は以前からおばの家の鮮卑人の侍女といい仲だった。母の喪に服すにあたり、おばが遠くに移り住むことになり、初めは侍女を残していくといっていたのだが、出発する段になって、連れて行くことにした。咸は客の驢馬ををかり喪服をつけたまま追いかけてゆき、騎馬に一緒に乗って帰ってくると、「跡取りをなくすわけにはいかないからな」と言った。これが遙集（阮孚）の母である。

これなどは、『世説新語』によくみられる服喪中の型破りな行為であって、相如に輪をかけた無軌道ぶりを示しているが、礼を踏み外した結婚という意味では同類である。『世説新語』には、嵇康や阮籍などのちに竹林の七賢とよばれる人々の逸話があつめられているが、彼らの行動にはしばしば司馬相如の影が見うけられる。例えば、阮籍は司馬相如と比較され、酒飲みか否かという点以外は同じだとされている⁽¹⁸⁾、先の話にも出てきた阮籍の ойの阮咸には次のような逸話がある。

阮仲容、步兵居道南、諸阮居道北。北阮皆富、南阮貧。七月七日、北阮盛曬衣、皆紗羅錦綺。仲容以竿掛大布犢鼻褌於中庭。人或怪之、答曰「未能免俗、聊復爾耳」。（任誕第二十三・10）

阮咸や阮籍は道路の南側に住んでおり、他の阮家の者は道路の北側に住んでいた。北の阮家はみな裕福で、南の

阮家は貧しかった。七月七日、北の阮家では衣裳の虫干しを盛大におこなったが、うす絹に錦にあや絹とすべてが豪華だった。咸は中庭で竿に粗末な布のふんどしを引っ掛けた。ある人が不思議に思ってたずねると、「俗気がぬけきれないので、ちょっとやってみただけさ」と答えた。

「犢鼻褌（ふんどし）」は「紗羅錦綺」との対比であるが、市で皿洗いをする司馬相如の姿が自ずかと思ひ浮かぶ言葉でもある。このように、司馬相如は阮籍・嵇康らを先取りして放蕩ぶりを示す人物として言及されており、東晋以降には竹林の七賢とも重なる形象を持っていたと思われる。

だが、たとえ司馬相如のイメージが好まれるものになつていたとしても、それが賦とまったく関係ないならば、やはり序に含む必要はあるまい。司馬相如の賦と如上の人品とは関連付けて認識されていたのだろうか。

後漢の班固の「典引」序（『文選』卷四十八所収）には司馬相如についてこう述べるくだりがある。

司馬相如洿行無節、但有浮華之辭、不周於用。至於疾病而遺忠、主上求取其書、竟得頌述功德、言封禪事、忠臣效也。

司馬相如は行いが下劣で節操もなく、ただ浮ついた華美な文章があるだけで、実用にはあわない。病にふせるにいたつて忠義の書を遣し、天子がその書を求めると、なんと天子の功德を称揚したもので、封禪のことを述べていた。忠臣の至りである。

ここではまだ司馬相如の行為は「洿行節無し」と非難されているが、それと並んで「浮華の辭」があげられている。「忠臣の效」と「封禪の事」が並べられているのと対照的である。これが一般的な認識であつたとすれば、相如伝前半の軽薄な逸話こそ「子虚上林賦」にふさわしく、後半の忠義を示す逸話は「子虚上林賦」の作者らしからぬ行いであるとしていたことになる。また、やや時代は後になるが、『文心雕龍』体性には「長卿傲誕、故理侈而辭溢（司馬相如は傲岸放誕であつたがゆえに、その文は放恣で饒舌である）」という。司馬相如の放胆さは、彼の文章の饒舌

さの根源であるとみなされていたのである。

以上のことを合わせて考えれば、一つの推論が成り立つ。郭璞は「子虚上林賦」に注するにあたり、賦の創作過程を説明するものとして、司馬相如の修行時代から武帝に見出されて奏上することになるいきさつを序としたのであろう。そして、その中において、卓文君との駆け落ち譚は「子虚上林賦」の作者にふさわしい司馬相如の傲誕たるイメージをもっとも端的に示すものとして位置づけられていたのではないだろうか。

六 結びにかえて

ここまで、司馬相如の「自叙」とされたものが、郭璞注「子虚上林賦」に序としてつけられていた『史記』『漢書』『司馬相如列伝』の一部（「子虚上林賦」以前の部分）ではないかという仮説をたて、その序が附された状況について考えてみた。もちろんこれは、郭注本とは別に編まれた司馬相如の別集にも「伝」が附載されていた可能性を排除するものではない。ただここでは、『相如集』の序として以外に、「子虚上林賦」の序としても「伝」がつけられていたことを指摘したかったのである。四章に述べたように、郭璞が「子虚上林賦」に注するにあたり、史伝の一部を切り取って序とし、それにも注をつけたことは恐らく間違いないが、それが劉知幾のいう「自叙」につながるものかどうかは定かではない。また、郭注本の「序伝」が賦序として賦の前におかれたものか、一巻の書物の序として最後におかれたものかも今となっては知りようがない。ただ、顔師古が序つきの郭注「子虚上林賦」を見ていることから、唐代に至るまで郭注本によって賦と「序伝」が一つのものとして読まれていたことが分かるのみである。そこに一つ推測を加えることが許されるならば、「序伝」部分は賦と緊密な関係を保ってはいるが、賦序としては分量的にも多く、それだけで独立した伝にもなっている、その曖昧さと他書からの類推が「自叙」説を生む要因になったとも考えられ

よう。

ところで、「子虚上林賦」に注釈をつけた郭璞は、訓詁学者であるとともに、自身も司馬相如風の大賦の作者であるが、郭璞の特徴を伝える逸話にはなぜか、司馬相如と似通っているところがいくつかある。まずは、相如が口吃とされ、郭璞が「言論に訥なり」（『晋書』本伝）とされる点。司馬相如、揚雄、左思そして郭璞と、修辭をこらした大華麗な大賦の作者たちは、文字による表現の饒舌さと対照的に口下手である。これはある程度事実に基づいてものだろうが、相如・揚雄という漢賦の二大巨頭がそろって吃音であったことから、後世の大賦の作者にもそのイメージが重ねられやすかったためでもある。そして、もう一つは、奔放な点。実は、郭璞にも術を弄して愛する女性をうまく手に入れる逸話が伝わっている。¹⁹⁾郭璞の場合は、道術を使うのであるから、司馬相如と同じとはいえないが、魏晋の風流人が司馬相如に見出していた奔放な愛情劇の系譜につらなるものだとはいえよう。郭璞の逸話はあまりにおとぎ話めいているから実話でないとしても、郭璞の活躍したころにはまさに魏晋の風流がもてはやされており、郭璞自身風流をきどるところがあったこともあいまってこういう逸話が生まれたのは確かである。²⁰⁾郭注「子虚上林賦」が編まれた当時、司馬相如の逸話は放達を示すものとして好まれ、「子虚上林賦」はその人となりの延長線上にあるものと見なされていた。このように作者の形象と作風が交錯した状況にあったとすれば、あるいはこうも考えられないか。当時の人々、そして郭璞にとって司馬相如は文章の手本であるとともに、「竹林の七賢」風の行動様式の見本でもあった。その両面がそれぞれ、賦注と賦序として一つの書物のなかに集約されたのではないか。そして、それを見た後世の人も多かれ少なかれ、相如の逸話と作風を不可分のものととらえ、相如を自身の放蕩ぶりをもうそぶくような人物だと見たからこそ、「自叙」説が生まれたのではないか、と。²¹⁾

〔註〕

- (1) 劉知幾の見た司馬相如の文集は特定できないが、『隋書』経籍志には「漢孝文園令司馬相如集一卷」、旧唐書』経籍志『新唐書』芸文志には「司馬相如集二卷」を著録する。
- (2) 金国永『司馬相如集校注』（上海古籍出版社・一九九三年）。なお、張溥は『相如集』のうち、相如の死の前の記述（「相如既病免、家居茂陵」）までを「自叙」だとしている。張溥の説の詳細については、本稿第三章を参照。
- (3) 揚雄の自序については、嘉瀬達男『漢書』揚雄伝所収「揚雄自序」をめぐる（『学林』二八・二九合併号・一九九八年）に詳しい。
- (4) 司馬遷の「自叙」をはじめ、書物の序としての「自伝」については、川合康三『中国の自伝文学』（創文社・一九九六年）参照。
- (5) 『史記』『漢書』にはしばしば、『文選』李善注にはない郭璞の注が見える。李善は全面的に郭璞注を採用したのではなく、取捨選択を加えたのであろう。
- (6) 『文選』には「天子遊獵賦」を「子虚賦」（①の「子虚賦」とは別、「上林賦」の二篇に分けて載せる。これについて、歴代、『文選』の編纂者の非を説くものも多いが、『文選』以前に「子虚」「上林」の呼称が定着しており、『文選』はそれを襲ったのであろう。
- (7) 皇甫謐の『玄晏春秋』（『芸文類聚』卷八十引）には「計君又授與司馬相如傳、遂涉漢書、讀匈奴傳、不識棠梨孤塗之字。有胡奴執燭、顧而問之。奴曰、棠梨天子也。言匈奴之號單于、猶漢人有天子也。予於是乎曠然發悟」とある。『漢書』とは別に「司馬相如伝」が教授されていたようであり、一般の史伝とは異なる位置づけだったことが窺える。
- (8) 『山海経』西山経「西王母其狀如人豹尾、虎齒而善嘯、蓬髮戴勝」の郭璞注に「蓬頭亂髮。勝、玉勝也。音龐」とある。
- (9) 力之「試論賦之範圍与漢賦序文」之作者問題——読『全漢賦』（『楚辭』与中古文献考説）巴蜀書社・二〇〇五年 所収。
- (10) 『後漢書』文苑列伝「欄衡伝」には「黄」射時大會賓客、人有獻鸚鵡者、射舉厄於衡曰「願先生賦之、以娛嘉賓」。衡攬筆而作、文無加點、辭彩甚麗」とある。『芸文類聚』卷五十六引「欄衡別伝」もほぼ同じ。范曄『後漢書』は成立時期が遅いので、「序」はそれ以前の『後漢書』あるいは『文士伝』などから取られたのかもしれないが、管見の及ぶ限りでは不明。
- (11) もっとも、序が賦への説明と導入の役割をつとめるのは、宋玉「神女賦」などにつとに見られるところであるが、序自体が架空の設定であるので、ここでは同列に扱わない。

- (12) 興膳宏「摯虞『文章流別志論』攷」(『中国の文学理論』筑摩書房・一九八八年 所収) 参照。
- (13) 現在、司馬相如の賦で伝わっているものは、『史記』『漢書』にのせる「天子遊獵賦(子虛上林賦)」「哀二世賦」「大人賦」以外に、「長門賦」「美人賦」「梨賦」がある。そのうち「梨賦」は晋・左思「三都賦」の注に引かれる「啍嗽其漿」という一句のみで、全体はうかがい知れない。「長門賦」は「文選」に、「美人賦」は「初学記」に収載されている。この両賦は徒来、偽作だとされているが、晋・葛洪「西京雜記」に見えることから、郭璞が注釈を著したころには、司馬相如の作だとして流布していたのだろう。
- (14) 前注参照。なお、『西京雜記』には司馬相如をめぐる逸話が見え、中には、「長安有慶虬之、亦善爲賦。嘗爲清思賦、時人不之貴也。乃託以相如所作、遂大見重於世」(長安に慶虬という人があり、また賦を作るのが上手だった。かつて「清思賦」を作ったが、当時の人は高く評価しなかった。そこで司馬相如の作だと仮託したところ、非常に世の人に重んじられるようになった。)などという話もあり、偽作が作られることも少なくなかったと思われる。
- (15) 『玉台新詠』卷九に「琴歌」として見える。
- (16) この逸話は『西京雜記』に見え、詩は『玉台新詠』卷一に「古樂府(體如山上雪)」として見える。
- (17) 『世說新語』品藻第九・80の劉注に見える。
- (18) 『世說新語』任誕第二十三・51に「王孝伯問王大、『阮籍何如司馬相如』。王大曰『阮籍胸中壘塊、故須酒澆之』」と見える。
- (19) 『晋書』卷七十二郭璞伝に「璞將促裝去之、愛主人婢、無由而得、乃取小豆三斗、繞主人宅散之。主人晨見赤衣人數千圍其家、就視則滅、甚惡之、請璞爲卦。璞曰『君家不宜畜此婢、可於東南二十里賣之、慎勿爭價、則此妖可除也』。主人從之。璞陰令人賤買此婢」と見える。
- (20) 『晋書』卷七十二郭璞伝に「然性輕易、不修威儀、嗜酒好色、時或過度」とみえる。
- (21) なお、清の呉汝綸『桐城先生点勘史記』卷一百十七にも、「前文子虛賦乃游梁時作、及見天子乃爲天子游獵賦、疑皆相如自爲賦序、設此寓言、非實事也。楊得意爲狗監及天子讀賦恨不同時、皆假設之詞也」と、①③の部分は「天子游獵賦」につけられた賦序であり虚構であるとする。呉説は本稿とは視点を異にするが、このような見方も「司馬相如伝」の賦以前の部分が、賦序としての機能をはたし得、序と見なされる可能性を十分に含んでいることを示したものだと言えよう。